

# 踏み跡 <My Mountains>

道志	北海道縦走(穴路峠から寺下峠へ)	No.139
----	------------------	--------

昭和44年12月14日

御坂峠・三ツ峠山の富士を夢枕に一夜を過ごした山中湖寮 (No.138 の山旅)、まだ皆寝ている部屋をすりぬけてバス停へ。ホテルマウント富士入口でタクシーをつかまえて富士吉田駅へ。

大月から上り列車に飛び乗って二駅で鳥沢駅。ここで交換の下り列車から降りてくる石関とドッキング。XX山岳同志会なる山の会の宗旨としての、「道志山塊のあらましを足で確かめよう」という企画のひとつ。北海道の山をできるだけ数多く歩いてみたいが、普通の山と違って水も小屋もない。従って日帰りの積み重ねをして行くしかない。そんなことから今回は会社のWV部の山と連続して、がめつくかけもち山行とした。駅前の町から小篠の集落へ。小篠の公民館の脇で朝食をとり、穴路峠へ向かう。

12月の中旬ともなると日は低く、9時になってようやく日差しのある一隅が見つけられる程度で、寒い。まだ融けない霜柱の道を、両手をニッカーのポケットで温めながら進む。

やがて道は藪がちの沢筋から離れてわずかな急登で穴路峠に正午きっかりに到着。

峠の南側には朝日、赤鞍を中心とした南道志の想外の高さ、白い衣をつけて人を寄せ付けぬ逞しさと美しさの富士とがある。世間並に13時までゆったりと昼食。

昼食休みの後は富士を背にして東へ、枯れ果てた雑木とカヤトの入り混じった尾根を進んで行く。

ここにはもう桂川沿いの集落の霜も融けない寒さは存在しない。枯れ葉をくすぐる僅かな風と、さんさんと降り注ぐ冬の午後の太陽がある。とても海拔1000mの山の上とは思えぬ暖かさとのどかさがある。これが道志の山の良さかもしれない。

倉岳山を過ぎるとさして急な登りはなく、すこしずつ高度を下げながら緩やかな起伏の尾根歩きが続く。地形も植物もあまり変化がないので、退屈と言えれば退屈でもある。

立野峠、寺下峠・・・、今日のコースに予定はないのでここで終わりにしても良い。時計を見たら15時半だという理由だけで寺下峠から梁川へ下ることに決めた。

ゆるい下りから、いくつかの集落を抜けて、桂川を渡り梁川駅に着く頃はもう今朝と同じように霜柱が固く凍った冷え冷えとした道志に戻っていた。



以上



<写真>  
上：富士白く逞し  
下：倉岳山方面